

まんだら通信

第 217 号 (通巻 252 号)

平成 26 年 07 月 西暦 2014 年 佛曆 2580 年 皇紀 2674 年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

従軍慰安婦

「日本は、世界という他人ひとさまに悪いことをしたことは一度もありません」と、いつも書きながら、同じことをまた言うのは些か気が引けるのですが、つい先日「日本は、シナや朝鮮やその他の国に迷惑をかけたから」という人に出会って、ああまだそう思って、間違ったことを信じ、日本人の誇りを失っている人が今でも多いのかと、とても残念だったので、もう一度書きます。

「したのはけしからん。」といっています。発端は吉田清二という人が三〇年前に『私の戦争犯罪』(三一書房)で、「戦時中、軍の命令で済州島に渡り、日本兵一〇人の協力で、島の女性二〇五人を慰安婦にするために、アフリカの奴隷狩りのように、トラックに押し込んで無理やり連行した。」と書き、その後も各地で講演したり、新聞に発表したりしたことです。

その後「済州新聞」が追跡調査をしました。島民は皆、そのようなことはなかったと証言し、現代史家の秦郁彦はくいひこさんも、「ご自身で取材しても同じ結論で、問い詰められた吉田さんは「あれは小説です」と白状したそうです。このような、事実ではない話に朝日新聞が飛びつき、大きな見出しで日本軍が悪かったことを宣伝しました。朝日新聞は間違いと分かったあとも、だんまりを決め込んでいますから、他の新聞やテレビもあつたこととして報道しました。一般の読者は、大新聞がウソを言うなどと思いませんから、そのまま信じてしまいます。韓国から見れば、言葉は悪いのですが、格好の「打ち出の小槌」になります。

韓国の言い分に添って発表された『河野官房長官談話』が、事実と違うと分かった現在も、日本をやり込める切り札として使われています。

韓国に修学旅行に行った高校生が土下座をさせられたり、アメリカのグレンデール市その他に『慰安婦の像』を建てて日本の悪さを宣伝したりして、アメリカ在住の日本人は、謂れない非難に肩身の狭い思いをしています。

何故、こういうことになったのでしょうか。占領軍がいなくなつてからも、経済成長第一で、相手の間違つた言い分に反論せず、先送りしてきた政府に大きな責任があります。

然し一番の責任者は、議員さんを投票で選んだ私たちだということですね。『戦後レジームからの脱却』、「ご先祖から受



け継いできた素晴らしい日本を取り戻そう、という安倍総理大臣でさえ、思つた通り言えないのは、私たち日本人が未だに『日本悪者論』にまつているから、ということですね。

学校では教えないけれども、本当の日本の歴史を学び直すことが、結局は世界に役立つことになるはず。私たち日本人は、正義と技術の素晴らしさ、思いやりや取引の正直さで『経済大国』になりました。

大東亜戦争まで世界を支配していた白人の国で、経済的に曲がりなりにも元気なのはアメリカだけです。日本は貯蓄額でも、外国に持っている資産でも、アメリカを抜いて世界一だそうです。

問題は、お金に目がくらんで、誇りを失うことではないでしょうか。誇りを失つた、ただのお金持ちでは、世界の尊敬も信頼も失つてしまうことは目に見えています。

かけがえのないこの国を誇り高い昔に返して、子や孫に手渡すことが、今生きている私たちの務めだと、私は思うのです。

寺使りなんだから、お釈迦さまやお経の話を書きたい、という方も多々あります。

お寺は「今、生きている皆が、心安らかに生きるために」あります。よその国から謂れない非難を受けた時、本当はこうですと、私たちが返答できなければ、子孫は立つ瀬がありません。

にっぽん人情小噺 落語家 三遊亭鳳豊

第一〇二話 演歌床屋

最近、床屋さんいろいろですね。

わずか十分で、髭剃りもなく、ただ頭を刈るだけで千円という床屋さんあれば、美顔術を施し、五千円の料金を払うのに、結構混んでいる理容室もあります。女性もそうなんですってねえ。カットのみなら千円以下の美容院もあれば、予約制で二万五千円のヘアサロンもあるんだそうです。

私がよく行く理容室は、カットと髭剃りで消費税込みで二千円で、年中無休です。いつも結構混雑しています。

でも、この床屋さん「バーバー ねこ」は、かな

りユニークなんです。第一、名前が変ですよ。なんで、ねこなんだと思つたら、本当は「かねこ」だったのですが、「か」の字がいつの間にか看板から抜け落ちてしまったので「ねこ」なんですって。全面鏡の前に椅子が四つありますが、働いているのは男性一人。しかも、二人ともかなりの高齢者です。ということは、どちらかが金子さんかと思つたら、これがちがう。吉田さんと伊藤さん。

吉田さんは八十歳、伊藤さんは七十五歳。どちらも、持病があつて、時間内、仕事にお医者さんに通つています。これも変です。なんでも、この店のオーナーが金子さんで、その方が亡くなったのですが、もつたいたないので、金子さんの息子さんがハローワークを通して、二人を雇つて、店を続けているんだそうです。

たとえば、お客さんが入ってくるでしょ。そうすると、普通なら「いらつしやい」とか何とか言うじゃないですか。そんなお世辞は言わない。「はい！」と言われ、「荷物はこつち」と言われて、客はすまなそうに隣りの空いている椅子の上を持ち物を置く。もちろん、冬なんか、コートは客が自分でハンガーに掛けるんです。ぶつさらぼうと言いか、無愛想と言いか。

僕が今年の四月に行った時は、めずらしく混んでいて、二つの席は満員。ようやく、七十五歳の伊藤さんのお客が終わつたので、次は僕の番だと思つて小さな待合室のソファから立ち上がった。伊藤さん、さつさと着替えて、何も告げずに、店を出て行つてしまった。しかたがありませんから、八十歳の吉田さんのお客さんが終わるまで待つてたんです。

「はい」。怒つたような吉田さんの声で、僕はようやく鏡の前に座りました。

「伊藤の野郎、どうしようもねえんだ」

なんか、吉田さんがぶつぶつ言ってます。「どうしたんですか?」「さつき、出て行つたヤツ、いるだろ。あいつ、怠け者でさ、『今日、医者に行く』なんて出て行つたけど、いつ帰ってくるかわかりやしねえんだよ。だから、俺はつかり働いてさ」

ああ、そうか。そういうことになるわけか、と思つたので、「月給なのに人の分まで働いて、大変だね」などと言つたら、歩合制だと言つた。つまり、

客が払う二千円のうち、担当理容師が半分の千円をもらい、残りの千円がオーナーの金子さんに渡るというわけだ。

「じゃあ、いいじゃないですか。働いた分だけ入るんだから」と言つと、「そうじゃないんだよ、お客さん、もう俺は働きたくないわけ。だって、この年で一日中立つてるんだぜ。くたびれる、くたびれる。それなのに、相棒はああやって、勝手に出かけるんだからさ」。

最初は、高齢者が仲よく理髪店をはじめたのかと思つていただけに、どうもそうじゃないらしいことがその時にわかった。ふたりはほとんど口を利かないそうです。

「仲が悪いんじゃないよ。話したりするのがお互いにめんどくさいんだよ」

「ああ、そうですか」
「ああ、髪を切つてもらおうのが申し訳ないようでした。ドアが開いて、僕のあとの客が入ってきました」。

「ああ、また客が来た。これじゃ、今日は昼飯食えないな」

僕の髪にハサミを入れ、チョキチョキ切りながら、吉田さんがボソツとつぶやいたのですが、なんだかこまでくると、妙におかしかったですね。

「八十歳になつても、仕事があるって、すごいことだと思いませんか」

そう僕が言つと、「いや、バチが当たつたんだよ。この年で働かないと食つていけねえんだから。普通は楽隠居だろ」

それからは、無言で、順序どおり髭を剃り、顔を温かいタオルで拭いてくれて、「はい」と椅子を起し、ブラシで首のあたりをきれいにしてくれて、終わりました。次のお客さんは、常連さんなんですよ。僕が終わつて、お金を支払つても、呼ばれるまでただ静かに待つていました。もちろん、吉田さんから「ありがとうございませう」のひと言もない。吉田さんは、ただ黙つて床に溜まつた僕の毛を箒で掃いて、ちりとりに集めていました。

それからひと月半ほど過ぎて、僕はまた、「バーバーねこ」を訪れました。
今度は吉田さんがいません。伊藤さんがひとりで営業していました。店内には、大きなポリウムで古い演歌が流れていました。

「はい」そう伊藤さんに言われて、この日は七十

五歳の伊藤さんの前に座りました。
「どうするの？」伊藤さんのしゃべり方には、どこか東北の訛りが感じられました。

「あつ、一センチほど切つて、あと全体的にすいてください。ちよつと髪が多いので」

「わかりました」
伊藤さんもあまり愛想がよくない。「もう一人の人は？」「ああ、さつき、黙つて、病院さ行つた。糖尿でな、定期的に医者、通つてるのっしや」

黙つて、とわざわざ言うところがおかしかったですね。

有線放送の演歌のイントロがはじまりました。

「この歌、いいねえ。知つてる？ サブちゃんの『ソーラン仁義』だべさ」

♪手前く生まれくはくソーラン節の
突然、北島サブちゃんの高い声に合わせて、七十五歳の伊藤さんが唸りはじめたのです。

ハサミを持った手が止まったので、思わず、振り返ると、伊藤さん、目をつぶつて鼻の穴を大きく膨らませて歌っているじゃないですか。気持ちよさそう。

「いやあ、わだすの歌、自分ではうまいと思つてねんだいども、人さ言わせつと、気持ちが伝わってくるって。まっ、まんず、お世辞だもな」ようやく、伊藤さんのハサミを待った手が動きはじめました。

「お父さん、若い頃、歌手になつたかつたんじゃないの」と、思わず聞きました。

すると、「いやあ、それどこじゃねえ。食うや食わずだもの。オラホの家は土百姓で、ろくに飯も食えねがった。米はつくつていたが、まともな米はみな金に換えるから、青米つて言つて、実らない米だとか黒い麦飯だ。おかずなんかねえから、味噌ちよこちよこ塗つてな、それで食つた。いや、まんず、貧乏だつたな」。

十年前、おふくろが死ぬ前にオラの手握つて、泣いたものな。『修学旅行さ、行かせられねえで、ごめんなあ』つて

「それでな、オラ、おふくろの布団にもぐりこんだんだ。ほれ、下さ妹とか弟がいたんで、子供の頃から母親といつしよに寝たことなどねがったから、『かあちゃん！』つて背中から抱きついたので。『ありがとう、ありがとう』つて言いながらな」

「お母さん、喜んだでしょう」

「わかんねえ。それからしばらくして亡くなった。秋祭りの夜です」

有線放送は、石川さゆりの「天城越え」に代わつていた。すると、伊藤さんはポケットから大事そうにスマートフォンを取り出し、「やつぱり、サブちゃんがいいなあ。これ、聞かか？」と言いながら、器用に操作すると、軽快なトランペットの演奏とともに、「函館の女」が今度はスマートフォンから聞こえてきた。もちろん、「天城越え」も聞こえている。

はくるばる来たぜく天城くえく
なんだか、もうどうでもいい感じだが、伊藤さんにはサブちゃんしか聞こえないようだ。

なんで、今日はこんなに演歌がうるさいほどかかっているのか、その理由はすぐにわかった。演歌が大好きな伊藤さんだが、この店では、有線放送はかけられないのだ。聞こうとすると、吉田さんが黙つてスイッチを切つてしまふのださうだ。

「あの、歌が嫌いだから」

その吉田さんが今日はいない。だから、もう伸び伸び、演歌を聞いて楽しんでいようというわけだ。まさに鬼のいぬ間の洗濯。

「お父さん、そんなに歌が好きなら、仕事が終わつたらひとりでカラオケボックスなんか行つてんじゃないの？」

「いや、行がねつす。カラオケ高いもの。だから、スナックで毎晩歌つてるのっす」

「えつ、スナックのほうが高いでしょう。酒飲むんだから」

「いや、酒飲まね。同じ故郷出身のママがいで、ウーロン茶二杯飲んで、好きなだけ歌つて千円だから。寝る前にそこに行つて歌うから」

「え、寝る前つて。お父さん、奥さんや子供は？」

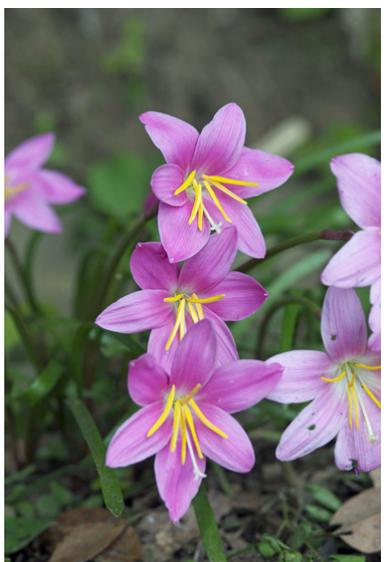
「そんなもの、いねえ。あの人も家族はいねえよ」

「あの、人つて？」

「もうひとりの床屋。いつもあつちの席で髪切つてるでしょ、今日はいねえけつども」

ああ、吉田さんか。「いや、バチが当たつたんだよ。この年で働かないと食つていけないんだから。普通は楽隠居だろ」あなたはたしか、そう言つていましたよね、吉田さん。今度、ゆつくりあなたの人生を聞かせてください。あなたにハサミで髪を切つてもらいながら、こんな僕にでも、生きることの素晴らしさを教えてください。

それにしても、手に職を持つことつて、こんなにすごいことだということを教えられた午後でした。



ない筈です。今の韓国大統領のお父さんで、大統領だった朴正熙は、日本の陸軍士官学校を優秀な成績で卒業して、満州国軍(日本軍)の中尉に昇進しています。あの頃、朝鮮人や台湾人などを、謂われなく差別したことは事実で、日本人は大いに反省しなければなりません。が、なかったことをあつたというのも間違いです。▼今月の野草はサフランモドキ【ヒガンバナ科タマスダレ属】。うっとうしい梅雨の雨上がりに日差しを待っていたように、ピンクの花が開きます。子供の頃から、アメフリバナと聞いてきました。メキシコ生まれで、江戸時代に来たのださうです。2014.7.8 龍渉

の張らない咄嗟の修理などのための用心です。この時に島崎の星野古市(久八)さんに替わつて、村田真美さんが島崎と東横渚地区を受け持つてくださることになりました▼慰安婦の話の補足です。実際は女術(ぜげん)といわれる朝鮮人の斡旋業者が集めたのが本当で、軍当局は彼らに「女性が不利になるようなあこぎな真似はするな」と再三警告しているさうです。それにしても、日本の官憲に“強制的”に娘達が連れて行かれるのを、朝鮮の人たちは黙って見ていた程の腰抜けだったので、まして警察官の8割以上が朝鮮人だったので、暴動が起きてても不思議では

▼月日は早いもので、今年も半分過ぎました。お元気にお過ごしでしょうか。数年前からツバメが来てくれるのは良いのですが、何といても本堂の中。些か困りものですが、子育てに励む親達を見ると、巢を壊すわけにも行かず、見守る他ありません。5羽が元気に巣立ったらお代わりが巣ごもりを始めた様子です。▼5月31日役員会を開き、25年度の経常会計の決算報告がありました。お檀家1軒1年に6,000円負担していただいているもので、1,014,000円の入金があり、繰越金1,014,000円などと合わせて4,836,166円。支出は606,120円で、繰越金は4,230,045円になります。このお金は、建物の保険や金額

余滴